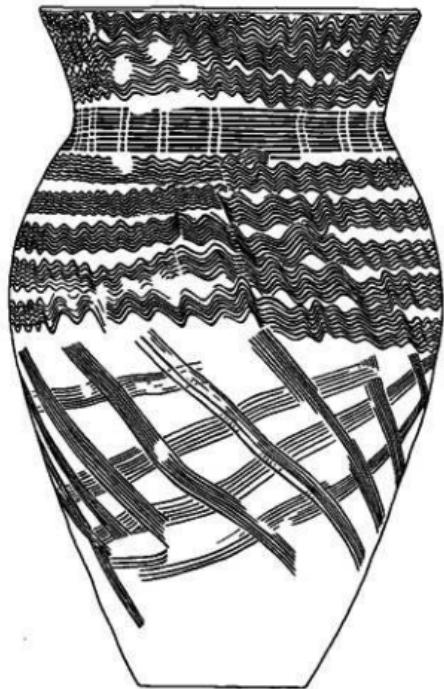


南大原遺跡

—上今井橋架け替え工事に伴う発掘調査報告書—



1980年3月

長野県下水内郡

豊田村教育委員会

南 大 原 遺 跡

—上今井橋架け替え工事に伴う発掘調査報告書—

1980年3月

長野県下水内郡

豊田村教育委員会

序 文

開発や公共土木事業の増加による文化財の保護がさけられるようになってから久しくなりました。この間、各地に重要な遺跡や遺物が発見され、私達の祖先の文化が1つづつ解き明かされていくことを報道機関を通じて知り深い感銘をおぼえ、文化財保護の重要性を痛感した次第であります。しかしながら、開発等も重要な仕事であり、相反する2つの事業を進めていくことは大変難かしい問題であります。こうした問題は今やはば全国的な傾向になってまいりました。

このような中でこのたび、豊田村村民の生活にとってきわめて重要な上今井橋が老朽化したため、新上今井橋の建設が行われることになり、この取り付け道路予定地に南大原遺跡の一部がかかることになりました。文化財保護の面から考えると、遺跡にかからない場所に建設することが望ましいのですが、現在の橋の付近でなければ種々問題が生じることから、この場所に決定したわけであります。このため十分な調査を実施し、貴重な歴史資料を後世に伝えることになったのであります。

南大原遺跡は、かつて故神田五六先生によって県道の東側の地が調査され、はるかに6,000年前の縄文時代前期と呼称されている時代の遺構や遺物が出土し、全県的にも著名な遺跡になっております。今回の調査地点はその地点とは100mほど離れていますが、まったく別の約2,000年前の弥生時代であります。このように私達の祖先がこの地にこんなにも長い間生活していたことを思うと感無量であります。ここに発掘調査を実施し貴重な資料を得ることができ、調査団各位の大変なご努力により報告書を刊行することができました。これが豊田村はもちろんこの地方の原始時代研究の重要な資料となることを確信しております。

最後に、今回の調査は遺跡調査会各氏ならびに団長をお願いした飯山北高等学校の高橋桂先生、調査主任の金井晴美氏はじめ各調査員のご協力と調査に参加いただいた上今井長寿クラブ他多くの方々のご協力によって成しましたものであります。ここに深く感謝申しあげる次第であります。

昭和55年3月

豊田村教育委員会

教育長 津 金 穢

例　　言

1. 本書は一般県道上今井停車場安源寺線上今井橋の架け替え工事にともなう、取付道路にかかる南大原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 南大原遺跡は長野県下水内郡豊田村大字上今井字南大原に存在する。
3. 本調査は中野建設事務所の委託を受けた豊田村教育委員会が「豊田村南大原遺跡調査会」を組織し、高橋桂が発掘担当者となって実施した。
4. 発掘調査は昭和54年9月10日より同年11月25日まで実施した。
5. 本書の執筆は高橋桂・金井晴美・金井正三・北沢健彦が担当し、それぞれ文末に文責を記した。なお土器の分類・考察については太田文雄の協力をえた。
6. 遺物の整理・実測・図面の製図及び写真撮影は金井晴美・金井正三が担当した。
7. 実測図の縮尺は以下のとおりに統一した。
住居址 $\frac{1}{60}$ 、小穴 $\frac{1}{40}$ 、土器実測図 $\frac{1}{4}$ 、土器拓影 $\frac{1}{2}$ (一部実測図含む) 、磨製石器 $\frac{1}{2}$ 、石製品 $\frac{1}{2}$ 土器の実測図中班点で示した部分は赤色塗彩されている部分をあらわしている。
8. 本調査のためにご指導、ご助言、ご協力を賜わった方々は以下のとおりである。記して謝意を表する。

桐原 健（長野県史編纂委員）

関孝一（長野県教育委員会事務局文化課指導主事）

大原正義（千葉県立安房博物館学芸員）

太田文雄（千葉県文化財センター調査研究員）

広瀬昭弘（国分寺市教育委員会）

西沢隆治（我孫子市教育委員会）

綿田弘美（立正大学学生）

(敬称略)

目 次

序 文 豊田村教育委員会教育長 津 金 機

例 言

目 次

挿図目次

写真目次

第 1 章	経 過	1
第 1 節	調査に至る経過	1
第 2 節	調査の経過	3
第 2 章	環 境	5
第 1 節	地理的環境	5
第 2 節	歴史的環境	6
第 3 章	調 査	9
第 1 節	調査の概要	9
第 2 節	層 序	10
第 4 章	遺構と遺物	12
第 1 節	1号住居址	12
第 2 節	2号住居址	16
第 3 節	3号住居址	19
第 4 節	1号小穴	21
第 5 節	2号小穴	23
第 6 節	3号小穴	24
第 7 節	4号小穴	24
第 8 節	5号小穴	26
第 5 章	考 察	27
第 1 節	土器について	27
第 2 節	石製品について	29
第 3 節	住居址について	30
第 4 節	小穴について	30
第 5 節	ま と め	31

挿 図 目 次

第 1 図	南大原遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	7
第 2 図	発掘区域及び遺構分布図	9
第 3 図	調査区域内土層図	11
第 4 図	1号住居址実測図	12
第 5 図	1号住居址出土土器（1）	14
第 6 図	1号住居址出土土器（2）	15
第 7 図	住居址出土の石製品	16
第 8 図	2号住居址実測図	17
第 9 図	2号住居址出土土器（1）	17
第 10 図	2号住居址出土土器（2）	18
第 11 図	3号住居址実測図	19
第 12 図	3号住居址出土土器（1）	20
第 13 図	3号住居址出土土器（2）	21
第 14 図	小穴実測図	22
第 15 図	小穴出土土器（1）	23
第 16 図	小穴出土土器（2）	25
第 17 図	磨製石器	26

写 真 目 次

- 写真一 遺跡全体
1. 調査前 2. 造構全景
- 写真二 調査区域内堆積土層
1. 南東～北西 2. 北東～南西
- 写真三 1号住居址
1. 遺物出土状態 2. 住居址全体 3. P6 遺物出土状態
- 写真四 1号住居址の遺構と遺物
1. 炉址 2. 土器出土状態 3. 出土土器
- 写真五 1号住居址出土遺物
1～2 覆土内出土土器 3. P6 出土土器
- 写真六 2号住居址
1. 遺物出土状態 2. 住居址全体
- 写真七 2号住居址出土遺物
1. 壺形土器出土状態 2. 壺形土器 3. 出土土器
- 写真八 3号住居址
1. 遺物出土状態 2. 住居址全体
- 写真九 3号住居址出土遺物と各遺構出土の石製品
1. 3号住居址出土土器 2. 1・3号住居址出土の石製品
3. 1号小穴他出土の磨製石斧
- 写真十 小穴
1. 1号小穴遺物出土状態 2. 1号小穴 3. 2号小穴
4. 3号小穴 5. 5号小穴 6. 4号小穴遺物出土状態
7. 4号小穴
- 写真十一 小穴出土遺物
1. 1号小穴出土土器 2. 2号小穴出土土器
3. 3号小穴出土土器 4. 4号小穴出土土器

第1章 経 過

第1節 調査に至る経過

昭和27年、もっとも近代的な吊り橋として竣工した上今井橋は、昭和40年代から始まった急激な高度経済成長による爆発的な車の増加により、巾狭く橋脚も弱いことから、現在の交通量に対応できなくなってしまった。このため、中野方面の会社等に勤務する人も多い豊田村村民の間から、巾の広い橋に架け替えてほしいという要望が出るのも当然の成り行きであった。こうして、豊田村からの再三、再四にわたる陳情により、この橋を所管する長野県は架け替え工事を昭和55年度から着手することに決定したのである。

ところが、新橋が出来るまでは旧橋が必要なため、旧橋の数10m上流に架橋することになったが、その取り付け道路になる千曲川右岸は周知の埋蔵文化財包蔵地「南大原遺跡」にかかるのである。このため、長野県教育委員会の指導により、中野建設事務所の委託を受けて、豊田村教育委員会が発掘調査を実施することになったのである。

昭和54年7月、豊田村教育委員会は南大原遺跡調査会を設置し、調査団の編成を検討した。そして、飯山北高等学校教諭高橋桂氏に発掘担当者をお願いし、同氏を団長とする発掘調査団を組織したのである。

こうして、周囲のリンゴが色づく昭和54年9月10日より上今井長寿クラブの協力を得て発掘調査を実施することになったのである。

調査会

顧問	神田	務	(豊田村村長)
同	神田	与五右エ門	(上今井総代)
同	神田	全賀	(上今井区協議会議長)
同	佐藤	一雄	(上今井長寿クラブ会長)
会長	風間	宣揚	(豊田村助役)
副会長	津金	穂	(豊田村教育委員会教育長)
理事	高橋	桂	(飯山北高等学校教諭)
同	神田	治房	(豊田村文化財専門委員)
同	小林	修一	(同)
同	割田	栄治郎	(同)
同	小林	連雄	(同)
同	市川	善博	(同)
同	町井	丸二	(豊田村教育委員)
同	丸井	正彦	(同)

理 事 三 井 愛 之 輔 (豊田村教育委員)
同 森 山 一 男 (同)

調査団

團 長 高 橋 桂 (飯山北高等学校教諭)
調査主任 金 井 晴 美
調査員 神 田 稔 治 (長野県考古学会員)
同 松 沢 芳 宏 (日本考古学協会員)
同 金 井 正 三 (須坂市教育委員会主事)
同 望 月 静 雄 (飯山市教育委員会嘱託)
同 伊 庭 彰 一 (中央大学学生)
同 武 田 恵 彰 (同)
同 青 木 由 美 子 (長野経済短期大学学生)
調査協力員 畑上克臣、神田正一郎、神田すみい、神田トシコ、神田豊子、神田政博、
神田まよ子、神田みな、佐藤けさの、関善夫、高橋さき、高橋定治、高橋
梅子、田中とき子、西沢国太、藤田信子、丸山はるよ、渡辺すえ、綿田茂実
以上の方々のはか一々氏名は記さないけれども、多くの地元の皆さんか
らご協力をいただいた。

事務局 (豊田村教育委員会)

事務局長 北 沢 健 彦 (社会教育係長)
事務局員 白 井 今 朝 徳 (社会教育係主事)
同 吉 囲 照 子 (同)

調査組織は以上のとおりである。

(北沢健彦)

第2節 調査の経過

9月2日 調査区域内にグリット ($2 \times 2 m$) を設定する。

9月9日 錆入れ式、発掘作業の無事を祈願するのにふさわしい日和であった。

9月11日 発掘開始。予想以上の堅固な土に作業はなかなか進まず、また、耕作土除去作業中の遺物出土量は少ない。

9月17日 作業が進むにつれ、2層上面より弥生式土器の小破片が少量ではあるが、各グリットから満遍無く出土し始めた。

10月6日 9月末からの悪天候で進まないでいた、2層上面での遺物出土状態の記録と遺物のとりあげを終了した。

10月9日 造構確認のための精査に入るが、2層中より、土器片、石器類が次々と出土し、この層での遺物出土状態の記録と、とりあげ作業に入る。

10月16日 遺物のとりあげも終了し、再度造構確認のための精査に入ったところ、幅 50~60cm の溝跡のような造構面が、ほぼ南北方向に約 2.5m の間隔で発掘区域全体に確認された。これは後に、昭和初期頃に行われた天地返しの形跡であることが判明したのだが、他に造構面を確認することはできなかった。

10月21日 各グリットのベルト沿いに幅 30cm の試掘トレーナーを入れる。傾斜地であるため各々のグリットにより深さはまちまちであったが、10~20 cm 挖ることにより、次層の暗黄褐色の砂質土を確認した。

10月23日 試掘により確認された暗黄褐色の砂質土を追って全体を掘り進めた結果、G・H・I・J の16~14グリットに暗黒褐色の落ち込みが現われた。精査することにより、隅丸長方形の住居址の造構面であることが確認された。これが1号住居址である。この住居址には、東方のコーナー附近につき出したような形の半円形の明黒褐色の落ち込みも確認された。4号小穴となる。

この間に小穴1号、2号、3号、5号が確認されている。

10月28日 2号住居址（楕円形）、3号住居址（不整半円形）と次々に造構面が確認される。そこで、今までに確認された造構面の写真撮影をし、掘り始めた。1号住居址では、グリットのセクションベルトが丁度、住居址の長軸、短軸の位置にかかっており、これをそのままセクションベルトとして残して4分割し、また、2号住居址、3号住居址では、任意の十字セクションを設定し、掘り始めた。

11月3日 1号住居址のセクションの写真撮影と実測図をとる。また、各グリットの写真撮影・実測図をとり始める。

11月4日 3号住居址の十字セクションの写真撮影をし、残部を掘り進める。また、1号住居址では、セクションベルトの除去作業を進める。

11月12日 2号住居址の十字セクションの写真撮影をし、残部を掘り進める。3号住居址では、

遺物出土状態の写真撮影と平面実測図(1/20)をとり、遺物のとりあげも終了する。本住居址では、石器類、剣片・石くずが目立つ。また、1号住居址の東方のコーナーにつき出した半円形の落ち込みの遺物出土状態の写真撮影と平面実測図(1/10)をとり、とりあげる。

11月13日 上記の半円形の落ち込みのセクションを切り、この結果、1号住居址とは無関係の小穴であることが判明し、これを4号小穴と名づける。また、3号住居址の床面を精査し、柱穴5ヶ所、炉、焼土3ヶ所、周溝を確認する。

11月15日 1号住居址の遺物出土状態の写真撮影をする。2号住居址では、遺物出土状態の写真撮影、平面実測図(1/20)をとり、遺物のとりあげを始める。

11月16日 1号住居址の遺物出土状態の平面実測ととりあげに入る。2号住居址では遺物のとりあげを終了し、床面精査に入る。

11月17日 1号住居址の遺物のとりあげも終了し、床面精査に入る。各住居址ともすでに貼り床であることは判明していたが、精査が進むにつれ、全容が明確になり、明黄褐色のきれいな、たたきしめられた床が検出された。しかし3号住居址はその痕跡をわずかにとどめているだけであった。また、1号住居址と3号住居址に周溝が検出された。

11月20日 3号住居址の平面実測図(1/20)をとる。本住居址は、昭和初年の道路拡張工事の折、半分切り取られており、不整半円形を呈する。

11月24日 1号住居址、2号住居址の柱穴・炉・小穴などを掘りあげる。また、発掘区域の全体平面実測図をとる。

11月25日 発掘調査終了日。各住居址及び発掘区域全体の写真撮影、2号住居址の平面実測図、そして、各住居址のエレベーションをとる。

秋雨の時期でもあり、水はけの悪い本遺跡での調査は、いたずらに時間を費した感がある。例えば、水のかい出しや泥塗となってしまった遺構内外の清掃作業をくり返したことなど……。

(金井晴美)

第2章 環 境

第1節 地理的環境

遺跡は、長野県下水内郡豊田村大字上今井字南大原に所在する。「上今井というところで船を待つ二、三の客が岸に立っていた。船頭はジャブジャブ水中に入つて男女の客を負ってきた。砂の上を離れる舟底の音がしたかと思うとまた橋の音が起つた。その音は千曲川の静かな水に響いてあたかも牛の鳴声の如く聞える。船の鳴くようにも。」これは島崎藤村の千曲川のスケッチの一節である。藤村が上下した千曲川は、明治初年に豊田村上今井の上流の村々が洪水の害を免れるために、新たに開拓したものである。

悠久と善光寺平を流れてきた千曲川は、上水内郡豊野町蟹沢（往時千曲川通船の船着場）付近で西を米山山塊、東を長丘丘陵によって画され、急激に流路をせばめ各所に小平地を残しつつ、飯山市連地区にいたる約8軒間を穿入蛇行しつつ流れしていく。

明治初年の流路変更までの千曲川は、上水内郡豊野町二ッ石付近で大きく流路を右に変えて長丘丘陵の麓を洗い、中野市大俣で大きく左折して、豊田村荒山地籍にぶつかり、再び右に流路を変えて飯山方面へと流れている。旧河川の右岸である中野市高丘地籍（具体的には、牛出、栗林、牧の入）が常に浸食されたのに対し、左岸である下水内郡豊田村上今井南大原地籍では自然堤防が発達し、あたかも洲のような地形が形成された。この洲状地形の場所が遺跡の所在地点にあたる説である。



旧千曲川畔にある開田碑

発掘調査地点は、旧河川に面した自然堤防上にあり、最も高い場所にあたる。ここから次第に北西に向けて高度を下げて現在の千曲川にいたっている。しかし、傾斜は急ではなく緩やかである。現在の千曲川の流路は、かつて湿地帯であったろうと推定される。從ってここは、水田として利用され、上今井の人達にとっては重要な耕地であった。新水路の開墾によって上今井の人々は広大な水田を失い生活が極度に圧迫されたという。その生活苦を克服するために、旧河川の湿地帯を水田化するための努力が営々と続けられ、現在みられるような見事な水田が切り開かれたのである。この間における上今井の人達の苦労は並大抵ではなかった。このことは発掘調査地点の南東にある開田碑が如実に物語っている。

南大原地籍は、現在広大なリンゴ畑が展開している。広々と展開しているリンゴ畑の西隅を県道上今井停車場安原寺線が走っている。県道は調査地点の東側にあたっている。（高橋 桂）

第2節 歴史的環境

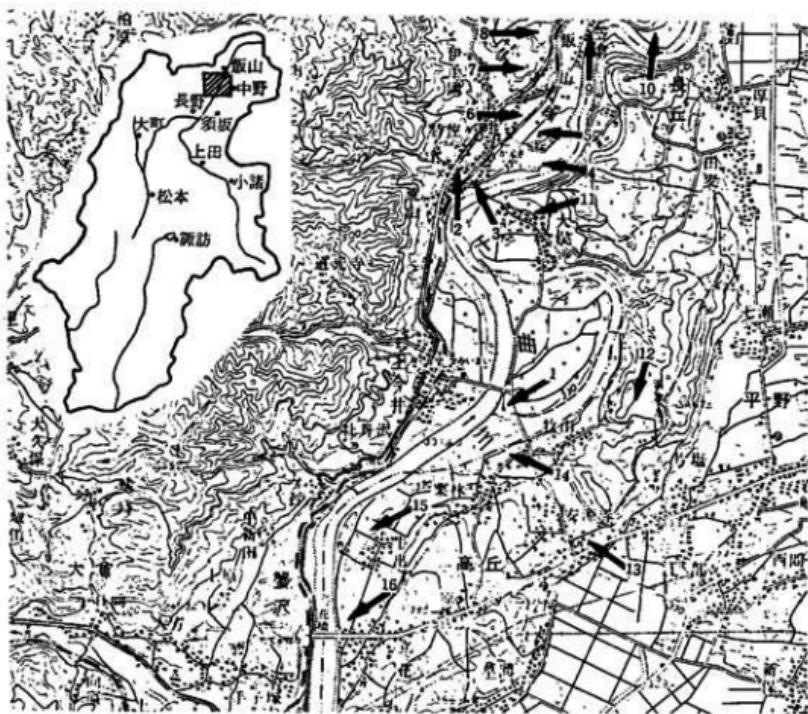
ここでは、周辺の遺跡についてのべよう。

先土器時代の遺跡として、長丘丘陵頂部に位置する浜津ヶ池がまずあげられる。昭和35年秋、浜津ヶ池の拡張工事が行なわれることとなった。神田五六先生の指示のもとに筆者が現地に赴き、ブルドーザーの動きまわる中調査を行ない、先土器時代の石器が出土することを確認したのである。これについては、すでに神田五六先生が報告しているし、石器の分析については金井汲次、川上元両氏が行なっている。更に同年、長丘丘陵南端丘頂部に中野市営し尿処理場が建設されることとなり、そのため地廻し工事が行なわれた。その折にも先土器時代所産の石器が出土した。昭和37年神田五六先生によって調査された。このことについても金井汲次、川上元両氏が報告している。その他に昭和41年に行なわれた安原寺遺跡調査でも若干の先土器時代所産の石器が出土している。

縄文時代に入ると、中部山岳地帯の縄文前期の一型式である南大原式土器が出土した南大原遺跡があまりにも有名である。今回の調査地域東方約100mほど距てた地点である。この調査は、昭和25年秋神田五六先生が調査したものである。更に関孝一氏が中心となって調査した立ヶ花遺跡も千曲川下流域では、特筆すべき縄文前期の遺跡といえよう。上原式土器を中心とする。また、牛出地籍からは、縄文草創期ないしは早期の所産と思われる頁岩製薄手の見事な石槍が出土している。

縄文中期になると豊田村上今井山根地籍が古くから知られている。この遺跡については同地籍在住の神田植治氏が研究で有名である。縄文中期初頭に属する見事な土器が出土している。また、豊田村替佐千田遺跡も古くから知られており、付近の好事家によって土器、石器が多く採集されている。千曲川の低位河岸段丘上に位置している。時期的には、縄文中期後半の遺跡である。

縄文中期後半から後期初頭に所属する遺跡としては、中野市長丘大保遺跡がよく知られている。昭和26年秋、畠地を水田に転換するための工事が施行された。その折、縄文中期後半の土器破片が出土したため、神田五六先生によって同年12月、翌年3月の2回にわたって調査が行なわれた。その結果、炉を中心とした見事な敷石住居址1軒、半壇の住居址2軒分が検出された。その中の一軒には埋甕があった。この遺跡は正式に報告されることなく現在にいたっている。豊田村豊井小学校



1. 南大原 2. 南大洞 3. 千田 4. 堤塚 5. 川久保 6. 宮沖 7. 飯綱平
 8. 飯綱平北 9. 笠倉 10. 猿袴島（以上豊田村）11. 大巻 12. 浜津ヶ池 13. 安源寺 14. 栗林 15. 牛出
 16. 立ヶ花（以上中野市）

第1図 南大原遺跡の位置と周辺の遺跡分布図(1:50,000)

のグランドも中期後半の比較的良好な遺跡であったが、正式調査する余裕がなく地均しされてしまい完全に埋滅してしまった。

弥生時代に入ると調査地域対岸の栗林遺跡があまりにも著名である。神田五六先生が、調査採集された資料を昭和10・11年に雑誌「考古学」に発表されて以来、信濃における弥生中期の遺跡として有名になった。また藤森栄一氏も同年に栗林遺跡について触れられている。

戦後昭和23・25年の2回にわたって小野勝年、坪井清足氏によって発掘調査が行なわれ、大きな成果があげられた。現在県史跡に指定されている。また、昭和40年晚秋に林茂樹、金井汲次、桐原健3氏によって栗林遺跡外側松原地籍が発掘調査されている。豊田村笠倉遺跡も弥生中期、後期の遺跡として知られている。特に八幡一郎先生が「有孔石剣の新資料」として笠倉出土の有孔石剣を「考古学雑誌」に昭和10年に紹介されてから本遺跡は有名になった。昭和26年に神田五六先生が発

掘調査を試みられた。更に笠倉遺跡の東方300mほど距てた琵琶島も弥生後期の遺跡として知られている。豊田村川久保遺跡は、弥生中期の磨製石器がセットをなして発見されたことで知られている。これについては桐原健氏によって報告されている。その他豊田村豊井小学校グランドに近接する南大洞遺跡も良好な弥生後期の遺跡である。中野市安源寺遺跡も古くから弥生式遺跡として知られている。昭和26年10月、神田五六、田川幸生両氏によって発掘調査が行なわれた。ついで昭和41年、金井汲次氏等によって大規模な調査が施行され、弥生時代の土塁墓をはじめとして大きな成果をあげた。更に昭和51年秋、金井汲次氏によって第3回の発掘調査がなされ、弥生中期土器や平安時代の鍛冶址が発見された。古墳時代にはいると、中野市草間、高丘地籍に古墳がいくつか認められるにいたる。いずれも後期古墳のようである。下水内郡豊田村にはどういう訳かついに古墳が築造されるにいたらなかった。豊田村には従って明確に古墳と断定し得るものは存在しないのである。

奈良、平安時代の遺跡としては、安源寺、西片塙遺跡が金井汲次氏によって調査されている。また豊田村上今井リング倉庫近辺から土師器坏が4～5枚重ねて出土したという。恐らく土塁墓の性格をもつものと思われるが実見していないので詳細は不明である。また、南大原地籍にも奈良、平安時代に属する土師器が散在している。従って、正式に調査をすれば住居址等が多く検出されるものと思われる。

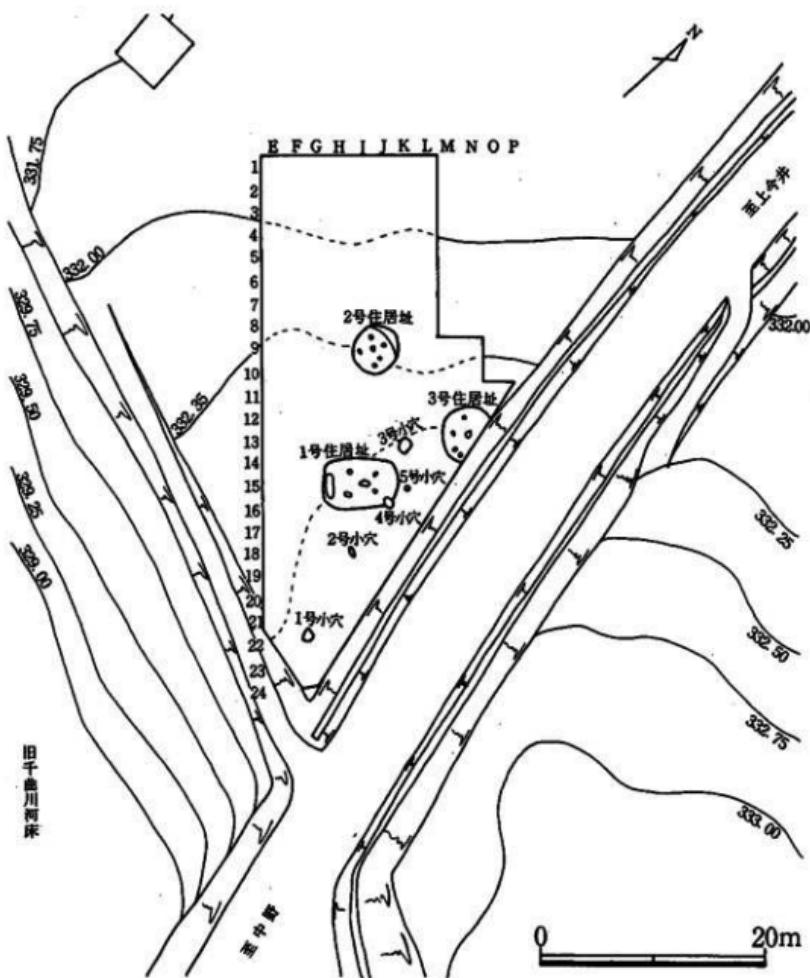
その他、中野市草間窯業遺跡は信濃における窯業遺跡として著名である。この遺跡は、金井汲次、大川清岡氏によって昭和39・40年に調査された。

以上簡単に周辺の遺跡について触れてきた。そして、これらの周辺遺跡が大部分千曲川の近辺に立地している。千曲川の果した役割の大きさを改めて認識した次第である。

(高橋 桂)

第3章 調査

第1節 調査の概要 (第2図)



第2図 発掘区域及び遺構分布図

調査区域は道路予定地であるため細長いことから、グリットを道路に合わせて設定することにした。そして現在の千曲川に近い部分は盛土が行われるため一応調査対象からはずし、県道側約20mが削平されることから、ここを中心² × 2 m グリットを全面に設定した。グリット名は南西から北東に向ってEからPとし、北西から南東に向って1から24とした。

まず6のラインから南東側のグリットを1グリットおきに手をつけ、遺物出土層の確認・遺構の検出に主眼をおいた。そして遺物はすべてポイントとレベルを測定し記録した。これはこの地が自然堤防上であることから、洪水によって土が堆積し明確な文化層の堆積状態が得られるかも知れないと判断したからである。

土層図は、北西から南東は2グリットごとに、南西から北東は4グリットごとに $\frac{1}{20}$ で記録した。

検出された遺構は埋没状態を知るため十字セクションを残して掘り、層位を確認し、また遺物の廃棄状態を知るためにポイントとレベルを記録した。

(金井正三)

第2節 層序 (第3図)

遺跡は千曲川の自然堤防上であることからすべて砂の堆積層である。調査区域は南東から北西に向って(現千曲川方面に向って)傾斜しており、各層もこれに沿ってほぼ規則正しく傾斜している。なお図中には等間隔で並ぶ溝状の遺構は昭和初年に行われた天地返しの溝である。

現地表面から遺構検出面までは50cm内外であり、調査区域内はほとんど同じである。この約50cmの層は4層に区分することができる。

第1層は耕作土(表土)であり10~15cmの厚さである。土質は微細な砂質土で、色調は淡褐色から茶褐色を呈している。遺物の包含量は多くない。

第2層は10~20cmの厚さである。土質は微細な砂質土であり、色調はうすい茶色から暗褐色を呈している。遺物包含量は第1層よりも多くなるが遺構面は検出されない。

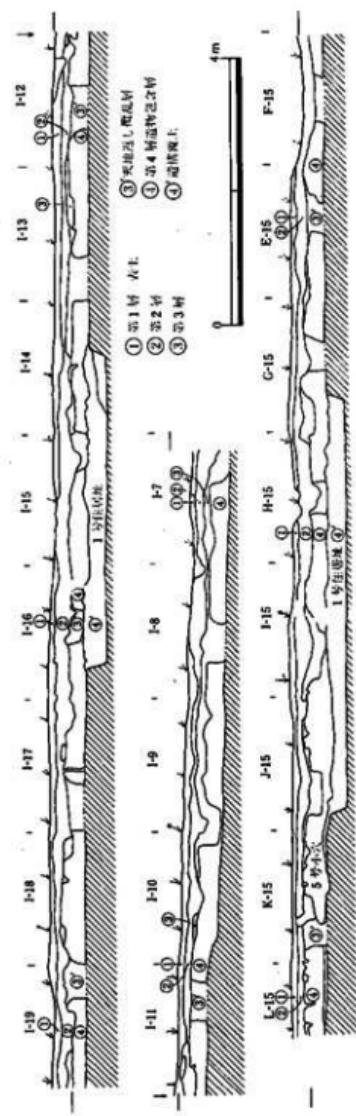
第3層は高位のI-19グリットからI-15グリットまでは所々にブロック状に堆積しているのみであるが、低位のI-14グリットからI-7グリットにかけては15cm前後堆積している。土質はやはり微細な砂質土で、色調は黄褐色から淡褐色を呈する。この層から巾50~60cm、深さ30cm前後の天地返しの溝が南北方向に、約2.5mの間隔で掘り込まれている。遺物包含量は比較的多い。

第4層は遺物包含層で、多量の遺物が出土した。30cm前後堆積しており、土質は上層と同じく微細な砂質土で、色調は黒色を呈している。

いずれの層も前述したように微細な砂質土であるため水はけが悪く、水を含むと粘性が著しく強くなり、乾くときわめて硬くなる。したがってもろい土器に付着した土は洗い落しにくく、強く洗うと土器が先に溶けてしまう。

なお住居址の覆土は黒色を呈するものの第4層よりはいくぶんうすく、はっきりと区分できる。

(金井正三)



第3图 调查区内土壤图

第4章 遺構と遺物

第1節 1号住居址

1. 造構（第4図）

プラン 長軸 6.34m、短軸 4.80m のほぼ隅丸長方形を呈する。

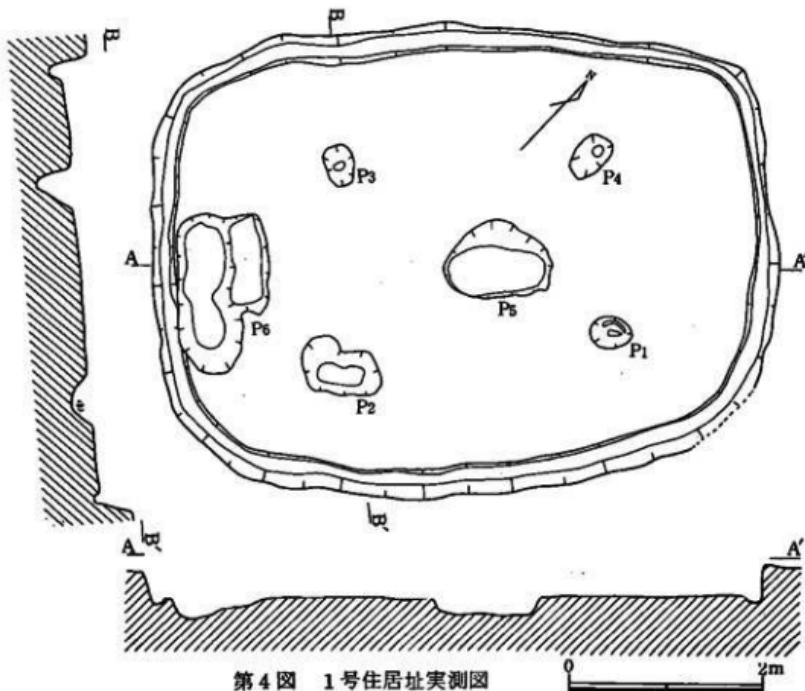
覆土 全体的には黒味のある暗黒褐色土であるが、北東一部には黄褐色の砂質土の堆積が確認された（第3図参照）。また、黒褐色土中の所々に炭化物の粒子が確認された。

壁 現在壁高は、東壁 35cm、西壁 27cm、南壁 40cm、北壁 30cm である。暗黄褐色のしまりの良い砂質土の明瞭な壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み面は第4層と思われる。

周溝 深さ約 6cm、幅 10~15cm ほどで一周している。

柱穴 P₁~P₄ が該当する。深さはそれぞれ最深 40cm 内外を測る。

床 明黄褐色の粘土が約 2cm の厚さで全面に貼られており、いわゆる、貼り床の状態である。床面は、P₃、P₄、P₆、炉址周辺が固くしまっているが、中でも炉址周辺は非常にしっかりしている。



周溝周辺、住居址北部の床は暗黄褐色でしまりはそれほど良くない。

炉 P5が該当する。地床炉である。掘り方は 110cm × 60cm の不整形である。覆土は3層に分けることができる。

I 層：黒褐色土

II 層：粘性のある黑色土

III 層：赤味がかった藤色の焼土

小穴 P6 が該当し、長径 165 cm、短径 90cm、最深 30cm の舟底形を呈している。

2. 遺 物

(1) 土器 (第5図)

1号住居址は今回検出された3軒の住居址の中で最大であったことも作用してか、遺物の出土量がもっとも多かった。しかし完形品はいずれも小形の壺・浅鉢・高环がそれぞれ1個体づつ出土したのみであった。

壺形土器 (1～5、13～15、26) 相対的に出土量は少く、10個体ほど数えるのみであった。口縁部は単純に強く外反するもの (1) と有段口縁のもの (13～15) がある。13～15は無花果形の壺と思われる。口縁部のみであるがいずれも内弯しながらほぼ垂直に立ち上がっている。13には耳が付いている。文様はいずれも棒状工具による沈線文が描かれ、口唇部には繩文が施文されている。

2・4は頸部、3・5は肩部である。いずれも焼成・胎土は良好である。文様はいずれも棒状工具による沈線文をめぐらしている。5はさらに櫛描平行線文、繩文を施文している。

26は底部である。平底で立ち上がりは強く外反している。胎土・焼成はあまり良くない。内外面共横位整形である。

壺形土器 (6～12、16～19、21～25) 壺は全土器の半数以上を占めるが、底部の形態の変化により台付壺や懸壺になるものがある。

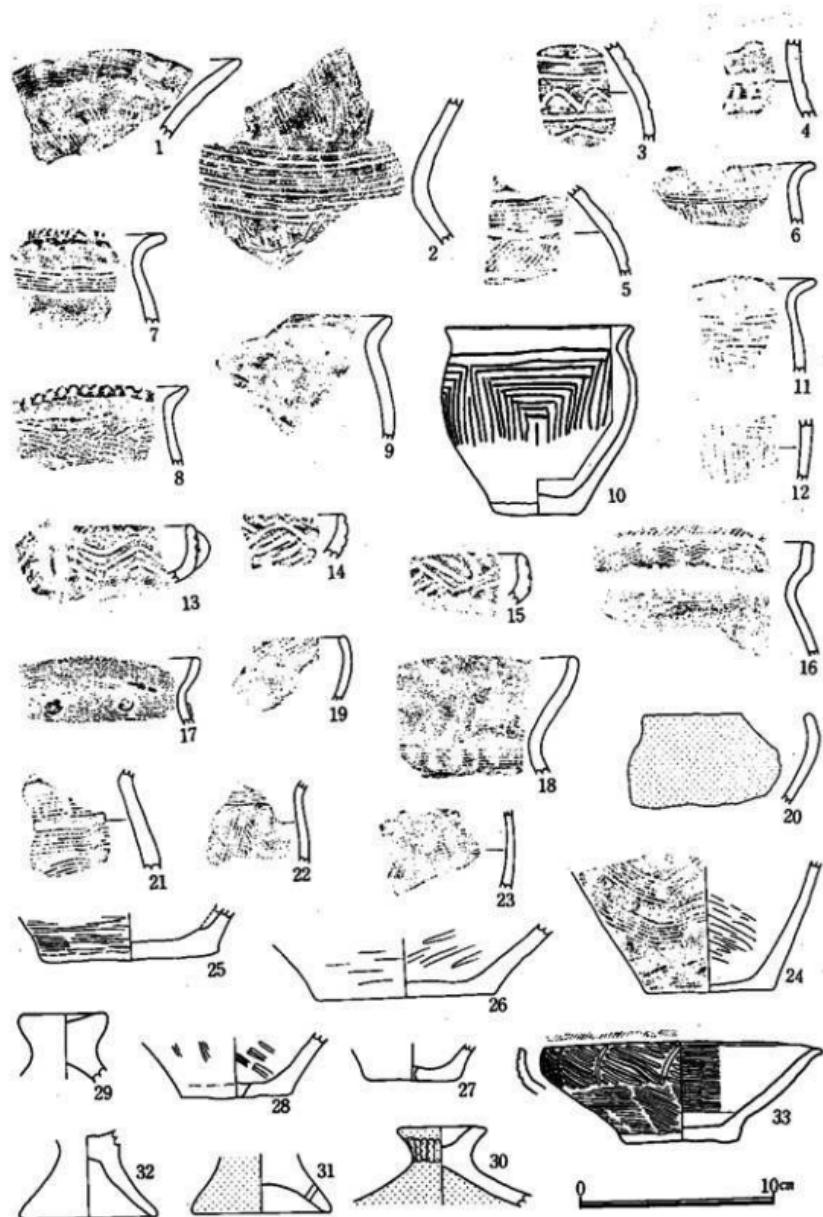
口縁部は短かく強く外反するもの (6～11)、口縁部が直立する有段口縁のもの (16～17)、及び口縁部が長く内弯しながら外反するものがある (18)。文様は櫛描平行線文、櫛描波状文、櫛描簾状文が描かれるもの (6～8、16～18) やいわゆる「コ」の字重ねのもの (10～12) がある。「コ」の字重ねの土器はいずれも小形であり、10は希少な完形品である。口唇部は刻目を付するもの (8) と繩文を施文するもの (7、16) がある。なお9のように器全面がまったく無文のものもある。

胴部は器壁が薄く仕上げられる。文様は櫛描波状文 (23) や櫛描鋸歯文 (22) が描かれる。

底部は割と小さく、あまり外反せずに立ちあがる。24・25はいずれも胎土はあまり良くない。文様は25は櫛描平行線文による鋸歯状文である。

瓶形土器 (28～29) 器形は深鉢形あるいは壺形を呈するも、小形の土器である。10個体近く出土したが、いずれも底部中央に孔が1つ穿たれたものである。

鉢形土器 (20) 口縁部片である。器壁は薄くきわめてていねいに整形されている。また内外面



第5圖 1号住居址出土土器 (1)

とも鮮やかな赤色顔料が塗布されている。口縁部のみであるため器形はあるいは高环かも知れない。

浅鉢形土器 (33) 片口が付いた小形の完形品で、器形、文様ともに特殊な土器である。口縁部径 14cm、高さ 5cm である。器内外面とも刷毛目痕がきれいについており、口縁部には太い棒状工具により沈線文が描かれている。

高環形土器 (31~32) いずれも小形で、ほとんどのものが赤色顔料が塗布されている。いずれも胎土・焼成・整形がきわめて良好である。31は台部に細い孔が約3cm離れて2つあけられている。

壺形土器 (29~30) 29はつまみ部のみである。非常に大きく直径 4.5cm を計る。胎土はあまり良くなく、ややもろい。30は胎土・焼成・整形きわめて良好で、内外面とも鮮やかな赤色顔料が塗布されている。くびれ部には指の整形痕が明瞭に残っている。

(2) P6 出土の土器 (第6図1~9)

P6から出土した土器はすべて小形で、赤色顔料が塗布されているものが多いという特異性があることから、住居址内のものと分けて扱った。

壺形土器 (1) 口径 4cm を計る小形壺の頸部片である。胎土は良好であるが、整形はあまり良くない。内外面とも赤色顔料が塗布されている。

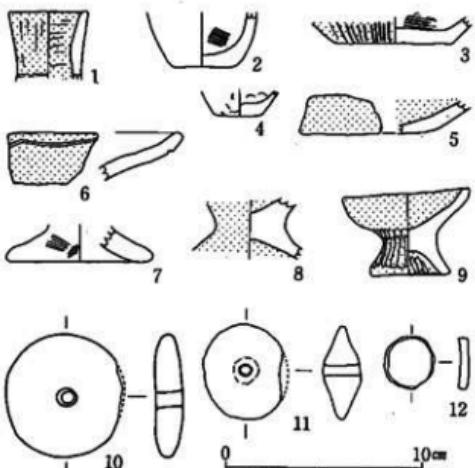
変形土器 (2~3) 2はきわめて小形であるが形態的には壺形である。非常にもろく茶色を呈している。3は胎土・焼成きわめて良好で、外面は赤色顔料が塗布されており、整形良好である。

手づくね土器 (4) 黒色を呈し、

整形悪いが、胎土は良い。底部の直径は 2.5cm である。

浅鉢形土器 (5~6) 5は底部であるが内外面共赤色顔料が塗布されている。胎土・整形きわめて良好である。6は口縁部で外面には一条の沈線が波状に横走し、赤色顔料が塗布されている。

高環形土器 (7~9) 7は脚部、8は環部と脚部の接点である。内外面、脚部内にも赤色顔料が塗布されている。9はほぼ完形の土器である。手づくね状の 小形土器で、口径 6.5cm、高さ 4.2cm を計る。器全面に指頭整形痕やヘラ整形痕がよく残っており、また赤色顔料が塗布されている。



1~9. P6 出土土器 10~11. 納糞車 12. 土製円盤

第6図 1号住居址出土土器 (2)

(3) 土製品 (第6図10~12)

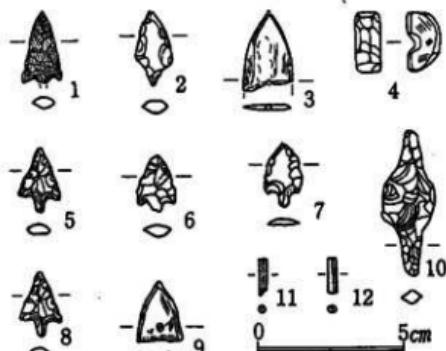
土製紡錘車 (10~11) いずれも砂多くもらい。11は径6.4cm、厚さ1.3cmである。12はいくぶん小形で、径4.8cm、中央部が厚く2cmを計る。

土製円盤 (12) 土器片を丸く加工したもので、径25cmを計る。

(4) 石製品 (第7図1~4)

打製石鎌 (1~2) 1は黒曜石製の有柄石鎌で、表裏両面ともにいねいに剥離がなされている。2は粘板岩製の有柄石鎌で、非常に荒い剥離である。

磨製石鎌 (3) 粘板岩製である。先端部と基部を欠いている。全体的に薄くいねいに仕上げ



1~4. 1号住居址 5~12. 3号住居址

第7図 住居址出土の石製品

られており、縁辺も鋭い。孔は両側からあけられている。

勾玉 (4) やわらかいロウ石製で、カット面が明瞭に残っている。長さ2cm、厚さ0.8cmである。

以上1号住居址から石製品は4点出土したのみである。

(金井正三)

第2節 2号住居址

1. 造構 (第8図)

本住居址では、北壁部分から2段の階段状造構、いわゆるベット状造構が検出された。

プラン 長軸4.30m、短軸3.90mの不整円形である。

覆土 黒味のある黒褐色土、一層のみである。

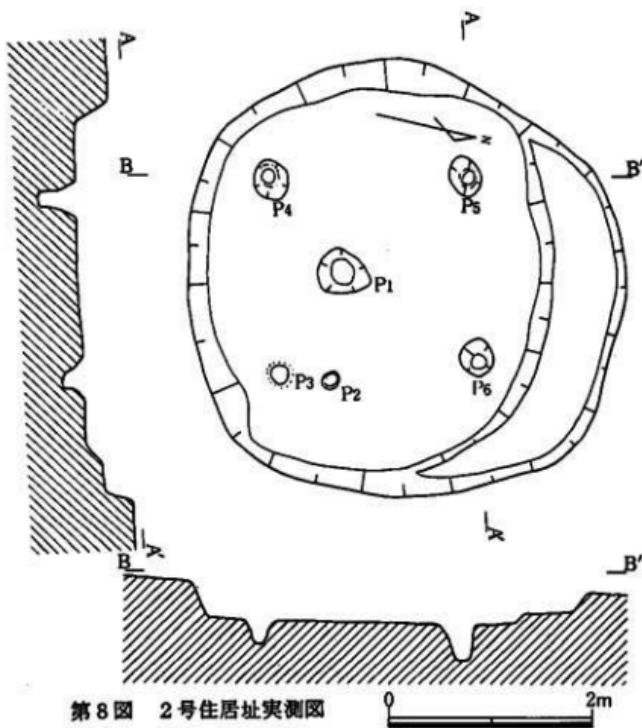
壁 壁高は、造構検出面より東壁39cm、西壁38cm、南壁38cmを測る。全体的に暗黄褐色の砂質土で垂直に立ち上がり、しまりは良好である。

柱穴 P₃~P₆の4個が該当するものと思われる。その中でP₃は、柱を立てる際に粘土で補強した形跡が見られる。深さは、各々最深20cm~40cmを測る。

床 ベット状造構及びその附近を除いて黄褐色の貼り床で固くしまっているが、特に中央部分とP₂、P₃、P₄の周辺は顯著である。

炉 P₁が炉と思われるが、焼土は検出できなかった。

(金井晴美)



第8図 2号住居址実測図

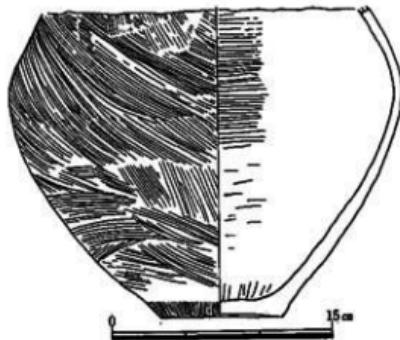
2. 遺 物

2号住居址は土器の出土量が少なく、また石器類は1点も出土しなかった。

(1) 土器 (第9・10図)

壺形土器 (第9図、第10図1～3、12～13) 第9図の土器は肩部以上がまったくなく、胴部以下はほとんど完全に残っている。現存高21cm、胴部最大径27cmを計る。内外面とも刷毛目整形痕がよく残っているが、内面は器壁がはげ落ちている部分が多い。

1は頸部、2・3は胴部である。1・3は胎土・焼成良好であるが2はきわめてもろい。文様はいずれも棒状工具による沈線文が主体である。3は縦文と三角形印刻文が施されている。

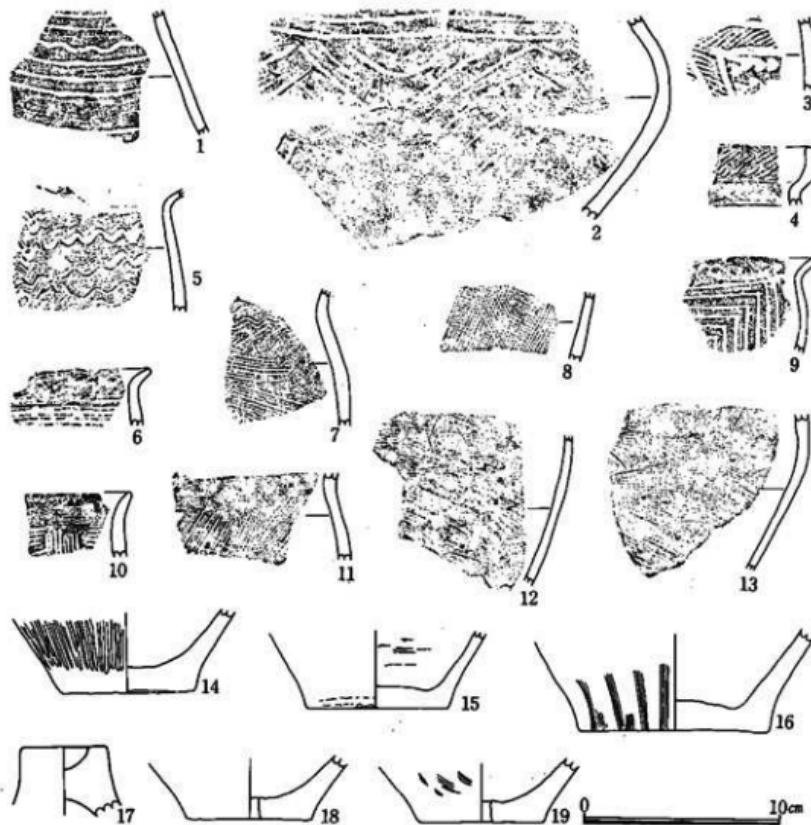


第9図 2号住居址出土土器 (1)

12・13は胴下半部で、同一個体と思われる。胎土はあまり良くなく、もろい。黒色を呈する。
変形土器 (4~11、14~16) 口縁部は有段口縁のもの (4)、口縁部が短く強く外反するもの (6・9)、そしてゆるやかに外反するもの (10) がある。底部は平底のものが多く (15~16)、若干上げ底のもの (14) もある。

文様は4は縄文で、5は櫛描波状文 (5本齒) である。6は櫛描平行線文、7・8は胴上半部が櫛描波状文、下半部は櫛描平行線文であり、7は7本齒、8は10本齒である。9は「コ」の字重ねである。14は底部辺であるが、外面に継位整形痕がよく残っている。16は下部に刷毛目整形痕が残る。

瓶形土器 (18~19) いずれも底部径 6.5 cm の小形土器である。孔はいずれも中央に 1 つあけら



第10図 2号住居址出土土器 (2)

れているのみである。

蓋形土器 (17) つまみ部分のみである。胎土に砂多くもろいため外面は荒れている。つまみ部
径は 4.5cmで、くびれはない。

(金井正三)

第3節 3号住居址

1. 遺構 (第11図)

昭和初年の道路拡張工事の折、
約半分が切られており、全容を
明らかにすることはできないが、
不整円形を呈していたようであ
る。

プラン 現存プランは南北 490
m、東西 3.50m の不整半円形で
ある。

覆土 黒褐色土、一層のみであ
り、多量の剝片や石くずを含有
している。

壁 暗黄褐色の砂質土でしまり
は良好であり、垂直に立ち上が
っている。

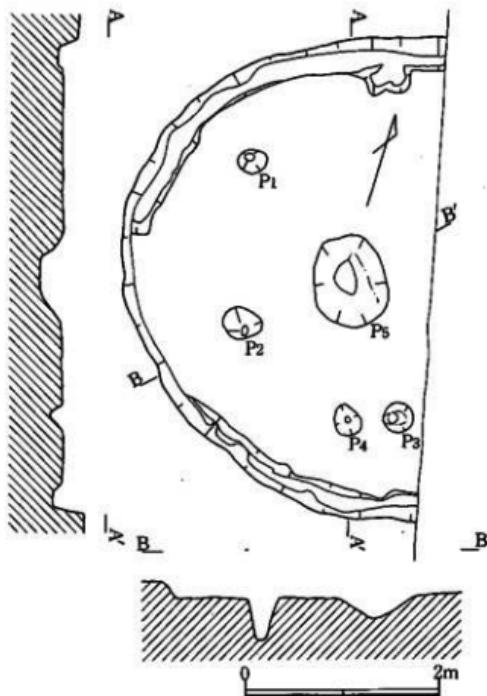
周溝 南壁直下一部を除いて巾
10~15 cm、深さ 10 cm の溝が確
認された。

柱穴 P₁~P₄が該当し、このう
ち P₂と P₃が主柱穴と思われる。

床 暗黄褐色の砂質土で良くし
まっており、所々に、貼り床を
施した痕跡が見られた。これは

炉、P₄・P₅の周辺に見られ、他に比べ、固くしまっている。また、小範囲ではあるが、3ヶ所に焼
土が確認されている。

炉 現存遺構からみて、やや中央に位置し、なだらかな擂鉢状 (長径 90 cm) を呈し、底に少量の焼
土が確認された。また、この炉中には多量の剝片・石くずが検出された。



第11図 3号住居址実測図

(金井晴美)

2. 遺物

遺構の半分が道路によって欠き取られていたこともある。遺物の出土量は極端に少なかった。

(1) 土器 (第12・13図)

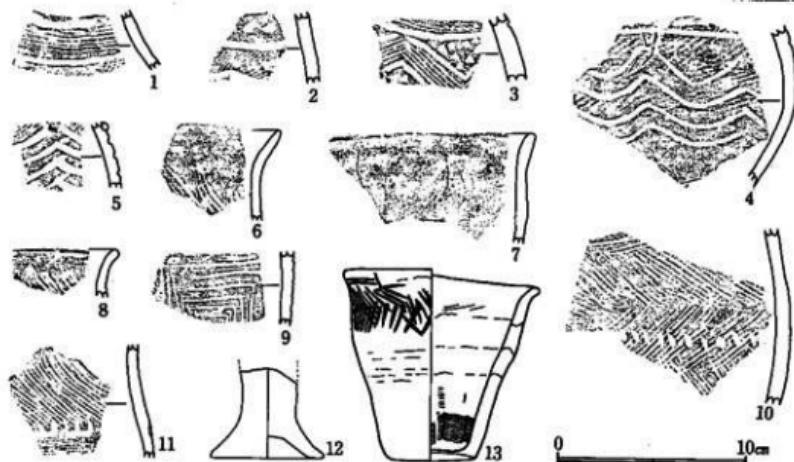
壺形土器 (1~5) 1~3はいずれも頸部に近い肩部である。1は5本歯の櫛状平行線文と上下に太い沈線を横走させ、さらにその下は繊細な縦文が施文されている。3は5本歯の櫛状平行線文、太い沈線、爪形文が施文されている。2は爪形文と沈線と繊細な縦文が施文されている。いずれも胎土・焼成きわめて良好である。

4・5はいずれも焼成・整形きわめて良好な胴部である。細かな縦文地に太い沈線の波状文が施文されている。また4には爪形文が施文され、5には瘤状突起が貼付されている。

壺形土器 (6~11、第13図) 6~8は口縁部であるが、いずれも単純にわずかに外反するのみである。7は外面に細かな刷毛目痕があるのみで文様はない。6・8は左上から右下に向けて条線文を施している。9はいわゆる「コ」字重ねの小形土器である。

10・11・第13図は同種の壺形土器である。いずれも胴上半部は櫛状工具による条痕文が施文され、胴部最大径付近に連続刺突文が1条押捺されている。10の歯は8本歯で、綾杉状に施文されている。第13図は口径25cm、現存高21cmを計る。口唇部外面には棒状工具による刻目が約1cmおきに施文され、口唇部は小波状をなしている。

深鉢形土器 (13) 高さ10cm、口径10cmの小形なコップ状土器である。整形悪く輪積痕が明瞭に残っている。文様は、口縁部に深い沈線の綾杉文が1条めぐるのみである。



第12図 3号住居址出土土器 (1)

高壺形土器 (12) 手づくね状の小形土器である。胎土・焼成良好である。颈部と脚部の間が長い特殊な形態をしており、また脚部が小さいことからあるいは逆形態の壺形土器かも知れない。

(2) 石製品 (第7図、5~12)

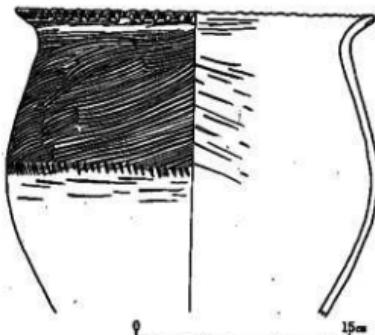
打製石鎌 (5~8) いずれも粘板岩製の有柄石鎌であるが、8は硅化されて白く変色している。調整はいずれも荒く、特に6・7はきわめて簡単な剥離である。

磨製石鎌 (9) ほぼ完形品である。薄く調整され、全体がよく磨かれており、縁辺の刃部も鋭く磨かれている。基部はほぼ直線的で、磨かれている。孔は両側から開けられている。

石錐 (10) 上下両端が錐部となっているが、いずれもあまり鋭くない。

管玉 (11~12) いずれも碧玉製である。11は片側の一部を欠くが、12はほぼ完形である。12は長さ1.2cm、太さはいずれも0.3cmである。針のように細い穴が片側から穿孔されている。

(金井正三)



第13図 3号住居址出土土器 (2)

第4節 1号小穴

1. 遺構 (第14図)

不整合形を呈し、長軸120cmを測る。主軸はほぼ東西方向である。掘り込み面を見つけにくかったこともあり、非常に浅くわずかに5~6cmを測るのみである。北東隅に柱穴状の穴が隣接している。関連性のある穴かも知れないが、性格不明である。

2. 遺物

(1) 土器 (第15図1、第16図1~10)

壺形土器 (第16図1~2) 1は頸部に近い部分である。縄文と沈線で文様が描かれている。風化が進みもらい。2は沈線のみである。

壺形土器 (第15図1、第16図4~10) 口縁部は短かく強く外反するもの(1・6)、有段口縁のもの(4)、単純に外反し折り返し口縁をなすものがある。1は胴部以上がほぼ完全に残っている。口径16cmを計る小形の土器である。器内面は刷毛目痕が明瞭に残る。外面胴部は刷毛目痕の地文上に7本歯の櫛描波状文が描かれ、頸部には同一原体の櫛描平行線文が1条施文されている。さらに口唇部には縄文が施文されている。6の頸部は簾状文である。

4は縄文地に沈線、5は無文である。7・8は胴部であるが、上半部は櫛描波状文、下半部は縫

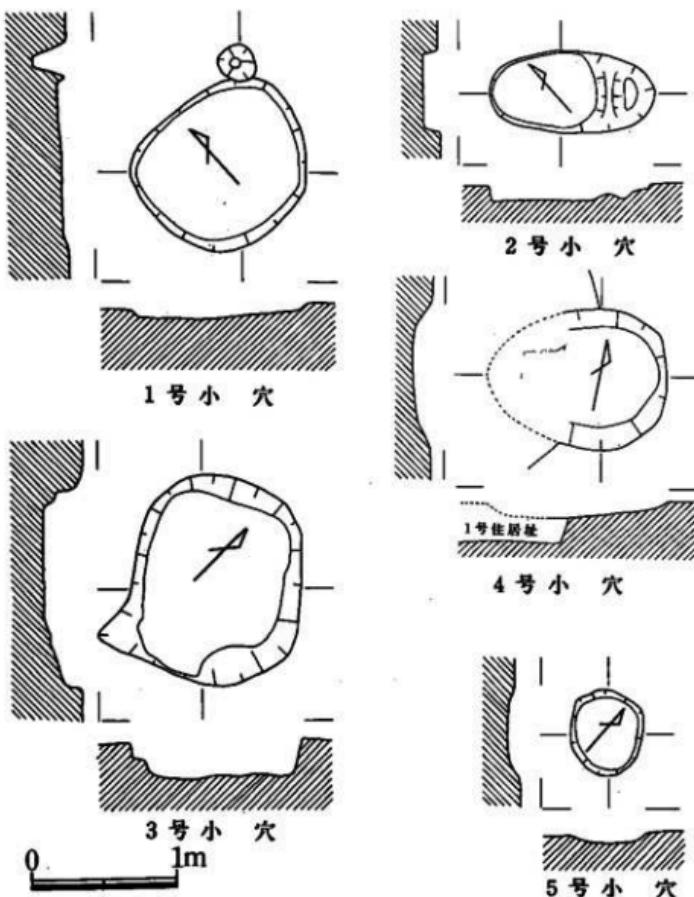
杉状の櫛状平行線文である。7は4本歯、8は5本歯の櫛である。

9・10は底部で、いずれも器肌が荒れておりややもろい。

(2) 石製品(第17図)

1の磨製石斧が1点出土したのみである。しかも先端と基部を欠いた洞部のみである。巾7.4cm、厚さ5cmで、かなり大きな太形始刃石斧と思われる。

2~4は遺構外から出土した磨製石斧である。2は先端部のみである。あまり使用されておらず、刃部はほとんど磨滅あるいは傷がついていない。3はほとんど傷がない完形品である。他に比していくぶん小形で、長さ14.7cmを計る。4は刃部が欠損した太形始刃石斧を石植に転用したものである。



第14図 小穴実測図

打面はよく磨滅しており、長さ15.3cm、最大巾8.3cmである。

石質は1~3は玢岩、4は閃綠岩である。

(金井正三)

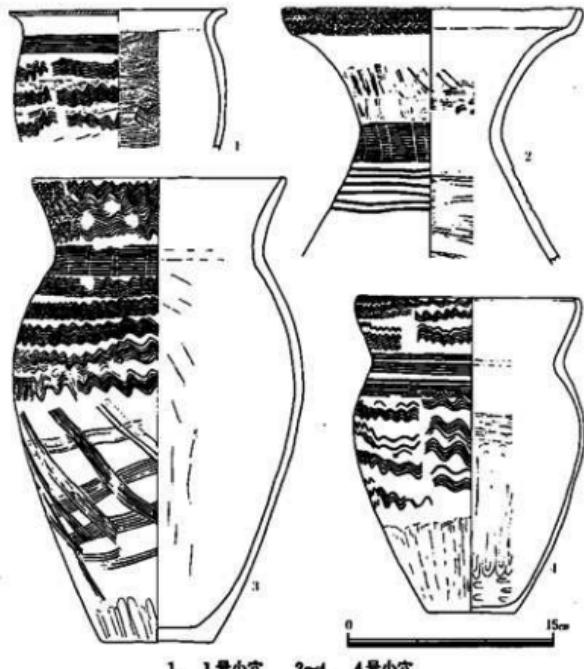
第5節 2号小穴

1. 遺構 (第14図)

長軸115cm、短軸55cmの長椭円形を呈す。深さは15cm程度であるが、層位がはっきりしなかつたため不確実である。

2. 遺物 (第16図11)

遺物はきわめて少なく、図示した器台状の土器と、きわめて小さい土器片が数点出土したのみで



第15図 小穴出土土器 (1)

ある。

器台状の土器は胎土不良できわめてもろいが、整形が非常に良好である。すなわち内面は刷毛目整形がきれいに行われている。表面はヘラでていねいに磨かれ、赤色顔料が塗布されている。なお胎土は非常に黒いため赤色はあまり目立たない。

(金井正三)

第6節 3号小穴

1. 遺構 (第14図)

隅丸方形を呈し、主軸はほぼ南北方向である。長軸は 140 cm、短軸は 114 cm、深さ 28 cm である。この小穴も層位がはっきりせず不明確な状態であった。

2. 遺物 (第16図12・13)

遺物の出土量はきわめて少なく、小破片の土器が数片出土したのみである。12・13はいずれも壺形土器の頸部である。いずれも小形で口縁部が短く強く外反する器形である。文様はいずれも頸部に 1 条の櫛描縦状文、胴部以下は櫛描波状文である。なお櫛の先端は12が 6 本、13は 4 本である。

(金井正三)

第7節 4号小穴

1. 遺構 (第14図)

平面形は卵形を呈し、短軸 97 cm、長軸は遺物の出土状態等から約 130 cm 程度と考えられる。長軸はほぼ東西方向である。深さは、掘り込み面を正確につかむことができなかったため、確認した面からは 8 cm 程度である。図示したとおり 1 号住居址の上に乗っているような状態であることから、1 号住居址が廃絶され埋没した後で本小穴が作られたことがわかる。

2. 遺物 (第15図 2~4)

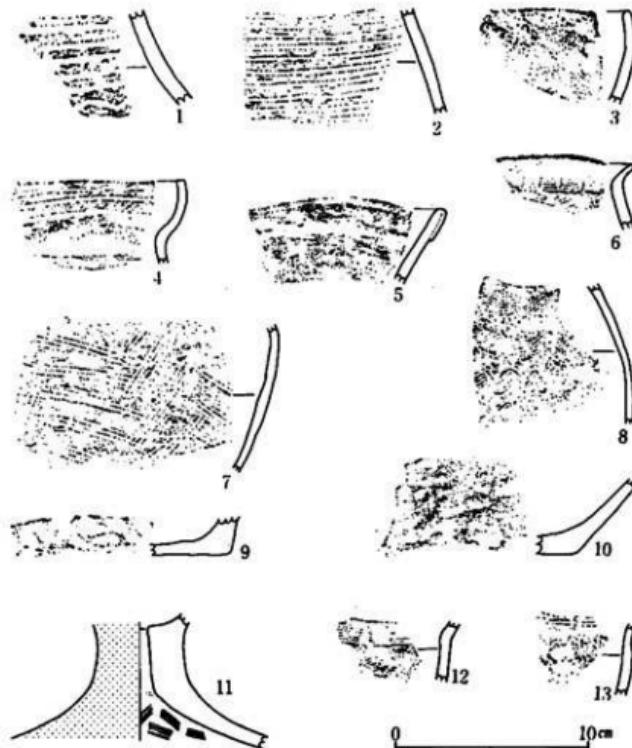
このせまい穴から完形の壺 2 個体と、ほぼ完全な壺の頸部が出土した。その他は土器の小破片が少量出土したのみである。

壺形土器 (2) 頚部以下はまったく残存していないが、口縁部がほとんど残っている。口径 22 cm を計る大型の壺である。口縁部は有段口縁である。胎土・焼成・整形をきわめて良好である。内面は刷毛目整形痕がよく残っている。文様は口縁部に櫛描波状文を 2 条めぐらせており、頸部に近い部分には縦位の刷毛目整形痕を残し、頸部は櫛描縦状文を施し、さらにその下には太い沈線を 6 条横走させている。

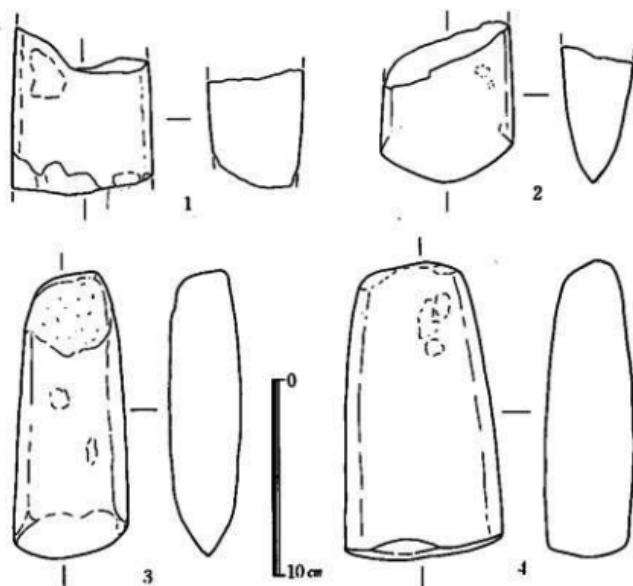
壺形土器 (3・4) 3 は底部付近の一部を除いてほぼ完形である。総高 34 cm、最大径は頸部中

ほどで、21cmを計る。口径は19cmである。口縁部が小さく胴部が比較的大きい安定した形態である。胎土・焼成は良好であるが外面の一部がはげ落ち荒れている部分もある。内面は下部が縦位整形、中ほどは斜位、口縁部は横位整形であるが、あまり明瞭な痕跡は残っていない。外面は底部辺に縦位のヘラ整形痕が残っている。文様はすべて7本歯の櫛齒状工具により描かれている。口縁部には櫛描波状文を3条、頭部に櫛描廉状文を2条重複させて施文し、胴上半部は5条の櫛描波状文、胴下半部は櫛描平行線文により格子目を描いている。

4も完形品であるが3よりもかなり小さい。形態もいくぶん異なるが、3よりも均整がとれている。高さは23cm、最大径は胴上部で、17cmを計るが、口縁部径はいくぶん小さい16.5cmである。胴部の器壁はきわめて薄く仕上げられており、3~4mmである。色調は全体的に黒色を呈している。口縁部は全体的に外反するも内側に反っており、特に口唇部は強く内側に折れている。整形は内面底部が横位、胴下半部が縦位、胴上半部はまた横位で、いずれも痕跡がよく残っている。外面は下半



1~10. 1号小穴 11. 2号小穴 12~13. 3号小穴
第16図 小穴出土土器 (2)



1. 1号小穴 2~4. 包含層
第17図 磨製石器

部のみ縦位整形痕が残っている。文様は6本齒の櫛齒状工具で、櫛描波状文、櫛描簾状文、櫛描波状文を施文している。

(金井正三)

第8節 5号小穴

1. 造構(第14図)

きわめて小さな穴で、長軸58cm、短軸50cmの梢円形を呈している。深さは6~7cmであるが不明確である。

遺物は出土しなかった。

(金井正三)

第5章 考 察

第1節 土器について

1号住居址出土土器（第5・6図） 壺形土器は口縁部形態から、無文で単純に外反するもの（1）と有段口縁をなすもの（13～15）が認められた。このうち有段口縁をなすものは棒状工具により波状文が描かれており、同形態・同文様の土器は長野市北部中学校西遺跡出土遺物中にみることができ、弥生中期後半の所産と思われる。

壺形土器は口縁部が短かく外反するもの（6～11）、口縁部が直立する有段口縁のもの（16～17）、及び口縁部が長く内窓しながら外反するもの（18）がある。口縁部が短かく外反するものは、櫛描波状文や櫛描平行線文が施文されるもの（7～8）、無文のもの（9）と、いわゆる「コ」の字重ねのもの（10～12）がある。7・8のような器形・文様は中期後半に出現したが、本例のように口縁部がきわめて短かく強く外反するものはむしろ中期末に多い。「コ」の字重ねの10～12も中期後半から中期末にかけて不規則にみられる土器で、台付壺になるものも多い。有段口縁の16～17はむしろ中期末に多い土器である。

鉢形土器は善光寺平に一般的な中央單孔のものである。

鉢形土器は内外面に赤色顔料が塗布されており、あるいは高环になるかも知れない。

浅鉢形土器は片口の付いた特殊な器形であるが、似たような器形・文様の土器は長野市旭幼稚園遺跡からも出土しており、中期末に比定できるものと思われる。

高环形土器は小形で赤色顔料が塗布されているものが多いが、目立った特徴はない。

蓋形土器はていねいな作りのもので、類例は栗林遺跡や安源寺遺跡にもみられる。

以上のような検討結果をふまえ、本住居址出土土器は全体的には中期後半よりもむしろ中期末に近いものと考えられる。

P6出土土器はほとんどが小形の土器で、多くは赤色顔料が塗布されている。また手づくね状の土器もあることから、祭祀的な意味あいのある土器群と考えられる。このことは住居址南壁に沿って細長く掘り込まれ、柱穴でもなく炉址でもないP6の性格を考えるうえでもっとも重要な意味をもつが、ここでは祭祀的であるということにとどめたいたい。

2号住居址出土土器（第9・10図） 壺形土器は口縁部がないためはっきりしないが、3を除いて1号住居址のそれと同じく中期後半から末に比定されるものと思われる。3は後述する3号住居址出土土器と同じ中期後半の古い部分である。

壺形土器は、口縁部が短かく外反するもの（5・6・9・10）と有段口縁のもの（4）がある。いずれも1号住居址出土土器中にある。

鉢形土器は1号住居址のそれよりも形態的には大きくしっかりとしているが、時期的にはほぼ同じと思われる。

壺形土器は1号住居址のそれのようにくびれ部がなく、壺と断定することはむずかしい。

以上のように本住居址出土土器は、器種が足りないものの、1号住居址出土土器と同じく中期後半から末に位置付けられるものと思われる。ただ足りない器種が鉢形土器・浅鉢形土器・及び高环形土器といいくぶん特殊な器形であることから、1・2号住居址が同時使用されていた場合、両住居址が異なった機能をもっていたのではないかと思われる。

3号住居址出土土器（第12・13図） 壺形土器は少なく、完形品はもちろん口縁部や底部が出土していないため、全体の器形を知ることはできないが、重心の低い無花果形を呈するものと思われる。図示した5片の土器（1～5）はいずれも縄文地に棒状工具による沈線文・櫛描平行線文・半月形印刻文が施文されている。これらは長野市平柴平遺跡のそれとほぼ同じであり、中期後半の古い部分に相当するものと思われる。

壺形土器は条痕文系土器が主体である（6・8・10・11、第13図）が、いわゆる「コ」の字重ねの土器もある（9）。条痕文は櫛齒状工具により、器上半を主体に施文される。器形・文様が類似した土器は平柴平遺跡S KY05から出土しており、該土器には櫛描波状文も施文され、いくぶん新しい様相である。「コ」の字重ねの文様（9）は中期後半から末にわたって小形の壺形土器と台付壺形土器に施文されたことは前述したとおりである。

小形壺形土器（13）と高环形土器（12）はいずれも特殊な器形であり、類例は不明である。

以上のような検討結果から、3号住居址出土土器は中期後半の古い部分に相当するものと思われる。

1号小穴出土土器（第15・16図） 壺形土器（第16図1～2）は地文に縄文を施文することなどの特徴から、中期後半に相当するものと思われる。類例は長野市北部中学校西遺跡出土土器にみることができる。

壺形土器（第15図1、第16図4～10）は有段口縁の4、口縁部が短かく強く外反する1及び6、そして胴部文様における上半の櫛描波状文と下半の櫛描平行線文の7・8はいずれも中期末に通有する器形・文様である。

以上のような結果から、本小穴出土土器は中期末の一群と考えられる。

2号小穴出土土器（第16図） 1個体の器台形土器のみである（11）。器台形土器はこの地方においては中期末からあらわれるようであるが、決め手がないので時期決定は差し控えたい。

3号小穴出土土器（第16図） 壺形土器が数片出土したのみである（12・13）が、いずれも口縁部が短かく強く外反する器形、頸部に櫛描縦状文、胴部には櫛描波状文であり、中期末に比定される。

4号小穴出土土器（第15図） 壺形土器（2）は有段口縁の大形のもので、長野市吉田高校グラウンド遺跡や飯山市田草川尻遺跡1号住居址出土土器に同様の器形の土器をみることができる。しかし文様は、田草川尻のそれはヘラ切りT字文であり、本例よりもいくぶん新しい様相である。吉田高校出土土器中には本例同様口縁部に櫛描波状文が描かれているものがいくつかあり、これらはほぼ同時期とみることができる。これは後期初頭に位置づけられるものと思われる。

壺形土器（3・4）は中期末の土器に比べて口縁部が立ち上るもの、後期のいわゆる箱清水式

のそれよりもかなり未発達（口縁部が相対的に小さい）であることから、やはり後期初頭と思われる。吉田高校グランド遺跡からは、口縁部から肩にかけてほとんど同形態の壺形土器が出土している。しかし田草川尻遺跡の壺形土器はすべて口縁部が箱清水式のそれのように発達しており、確實に新しい様相で、また文様も柳描平行線文がまったく消失し柳描波状文のみである。

以上の検討結果から、本小穴出土土器は弥生後期初頭に位置付けられるものと思われる。

各造構出土土器は以上述べたような編年の位置を占めるが、それをまとめると本遺跡で今回検出された造構が作られた順は、

3号住居址 → 1・2号住居址 → 1・3号小穴 → 4号小穴

となる。このうち1・3号小穴までが弥生中期、4号小穴が弥生後期である。

（金井正三）

第2節 石製品について

打製石鎌（第7図1～2、5～8） いずれも縄文時代晩期から伝統的な有柄石鎌で、荒い調整がなされているが、黒曜石製の1だけはていねいに仕上げられており、まさに縄文晩期からの系統である。

磨製石鎌（第7図3・9） 中期末に多いといわれているが、1・3号住居址から各1点づつ出土のみである。いずれも粘板岩製で、この地方通有の石質である。孔は1つで、同じようなものは対岸の栗林遺跡からも出土している。

石錐（10） 3号住居址から1点出土したのみであるが、形態的には縄文時代の石錐と全く同じである。

勾玉（4） 1号住居址から1点出土したのみである。やわらかいロウ石製であるが孔はなく全体的に腹がよく残っていることから、未成品とも考えられる。栗林遺跡からは有孔の勾玉が2個出土しており、全体的には角ばっているものの、穿孔はされていない。

管玉（11・12） 3号住居址のみから出土し、小形ではほぼ同形態の碧玉製である。同様のものは栗林遺跡から92個出土している（第1次調査まで）という。

磨製石器（第17図） いずれも太形始刃石斧である。3は完形であるが、4は刃部が欠損したため機能に転用されたもので、類例は須坂市内からも出土している。1・2は欠損品であり相当な力が作用したものと思われ、特に1などは少なくとも3つに折れている。太形始刃石斧は周辺遺跡からもかなり出土している。

以上のように石器の量は各造構ともきわめて少なく、特に2号住居址からは何1つ発見されなかった。器種もきわめて少なく太形始刃石斧は住居址内から1点も出土しておらず、石包丁・扁平片刃石斧などは造構内はおろか発掘区域内からついに1点も出土しなかった。

（金井正三）

第3節 住居址について

——平面形態を中心として——

弥生時代の住居には、竪穴住居、平地住居、高床住居など各種あるが、本遺跡から検出されたのは、竪穴住居3軒である。

ここで、この竪穴住居3軒についての時代性を住居の平面形態から考えてみたい。下表は北信濃のごく限られた遺跡の住居形態・規模などについて、まとめたものである。

住居址名	形態	規模(m)	辺の計測比	時期
栗林C地点住居址 南大原3号住居址	不整円形 (不整円形?)	5.16×4.59 5.0×(5.4?)	1×1.1 1×(1.1?)	中期
南大原1号住居址 南大原2号住居址	隅丸長方形 不整形方(ベット状遺構)	6.34×4.8 4.3×3.9	1×1.3 1×1.1	中期 後半
安源寺1号住居址 安源寺2号住居址 安源寺3号住居址	(隅丸)長方形 (隅丸)長方形 (隅丸)長方形	8×6 6×4.5 5.5×4	1×1.3 1×1.3 1×1.4	後期

この表の計測比を見るとわかるように、短辺と長辺の比が中期後半より増していくことがわかる。これは、円形プランから方形プランへと移行していく様相を示しているものと考えられる。中期における円形プラン、後期における方形プランを両極にして、その間にいくつかの中間形態が認められるわけだが、正に、本遺跡の1号住居址、2号住居址が、その出土遺物と合わせて、中間形態の遺構であると考えられる。

また、2号住居址では、北壁に沿って巾約1mの一段高い床の構造をもつ、いわゆるベット状遺構が検出されている。僅かな手持ちの資料によれば、後期に出現してくるようだが、本住居址は中期後半に位置するものであり、ベット状遺構の出現を究明するうえで貴重な資料になるものと思われる。

(金井晴美)

第4節 小穴について

1号小穴 遺物出土量は多いものの、掘り込みはきわめて浅く、土塗墓と考えることは無理があり、ましてや貯蔵穴とは考えられない。単なる凹地であろうか、周辺からも多量に遺物が出土している。

2号小穴 本小穴は底部が不確定であるが、掘り込み面はかなりはっきりしている。遺物は特異な器台形土器が出土していることから土塗墓とも考えられるが、確定はできない。

3号小穴 隅丸方形を呈し、掘り込み面は良好であるが、底部がはっきりとしない。1号住居址近くに位置しており、出土土器もほぼ同時期であることから、1号住居址の附属施設と考えられる。やはり土塗墓あるいは貯蔵穴とは考えにくい。

4号小穴 卵形を呈し確認面からの掘り込みはきわめて浅いものの、壺形土器の完形品が2個体と壺形土器の上半部が出土していることから、遺構であることは間違いない。恐らく土呂墓と考えられる。ただ1号住居址の上に半分乗っていることから、1号住居址と4号小穴の新旧関係、ひいては遺物の新旧関係をはっきりとつかむことができた。

5号小穴 きわめて小さな穴で、遺物もほとんど出土していないことから、まったく不明確な穴である。

(金井正三)

第5節 まとめ

南大原遺跡が識者に注目されるにいたったのは、そう古いくことではない。昭和初年、県道上今井停車場安源寺線の拡幅工事が施行された。その折に弥生式土器、石器が出土し、住居址の断面が一部露呈したことに始まるといってよいであろう。この折に三軒ほどの住居址の断面がみられたという。また多量の弥生式土器、石器類が出土したという。昭和20年代に入り再び道路の拡幅工事が施行された。その折に道路西側—今回の発掘調査地点—の壁面に矢張り住居址の断面が露呈した。この露呈した住居址の断面が3号住居址にあたる説である。

南大原遺跡が特に有名になったのは、昭和25年晚秋、神田五六先生が調査され、縄文前期南大原式土器を多量に検出されてからである。南大原式土器の出土地点は、今回の調査地とは県道をはさんで北東100mほど距てたところである。従って本報告書で、今回の調査地を南大原遺跡と呼称するのは、南大原式土器の出土地と混同する恐れが多分に存するが、他に適当な遺跡名を冠することができなかったため、混同される恐れを重々承知しながら敢えて南大原遺跡とした。将来、南大原遺跡B地点として分離する方がよいかも知れない。

さて、今回の調査について気づいた点を簡単に記しておこう。まず、出土土器についてであるが、弥生中期後半の好資料が得られたことは特筆してよいと思われる。北信濃特に善光寺平北端から奥信濃にかけては、弥生中期後半の土器については從来不明の部分が多くあった。対岸に存する栗林遺跡出土土器を標式として、栗林式土器なるものが認定されてからすでに40年以上になる。この間、桐原健氏が栗林式土器の再検討を行ない、笹沢浩氏がそれを批判する等、栗林式土器をめぐっての論議が活発であった。私達もまた奥信濃の弥生中期の土器型式については、大きな関心をもっていた。その後、飯山地方において、幸運にも弥生中期後半の土器を出土する遺跡の調査を行なうことができ、好資料に恵まれた。今、私達はこれまでに得た弥生中期後半の資料をもとに奥信濃該期の編年を組立てつつある。近い内に私達はその大綱をしかるべき誌上に明かにして、諸先学の御批判を得たいと考えている。その一つの重要な資料が今回の調査で得られた弥生中期後半の土器である。金井正三が、本章第1節において、出土土器の明確な編年的位置を記述しなかったのは、一つには以上の理由が存したからである。いずれにしても、本遺跡出土土器が該地方弥生中期後半から同末期にいたる土器型式を考える上で重要な示唆を私達に与えてくれたことを素直に喜びたい。

次に住居址についてであるが、弥生中期後半の住居址は北信濃に関する限り、平柴平例を除くと意外に少ない。そういう意味では、平柴平遺跡は重要な意味をもっているといえよう。平柴平遺跡検出住居址の全容の提示が一日も早いことを私達は心から期待している。該地方で検出された弥生中期後半の住居址は、プランは円形かそれに近い形態をとっている。それに対し後期に入ると長方形にはほぼ統一される。この変化は、どうも櫛目文の浸透度によるものであるらしい。換言すれば、畿内弥生文化が完全に該地方に浸透した段階で円形プランから長方形プランへと転換を示したと解してよいであろう。いうなれば箱清水式土器が確立する段階で長方形プランへと転換したといえよう。このことについても今後の究明課題としておきたい。

この他、石鎚では打製石鏃と磨製石鏃が出土しているし、勾玉、管玉も出土しており、該地方の弥生中期後半の文化のあり方を考える上で重要な資料となるであろう。

最後に南大原に居住した人達の農耕地は、現在の千曲川の流域にあったと考えてよいであろう。恐らく往時千曲川の流域は低湿地帯を呈していたことであろう。それにしても洪水の害を受けやすい自然堤防上に何故居住地がわざわざ設けられたのであろうか。単に後背湿地が存し、水稻耕作に適するからという簡単な理由からだけであろうか。どうもそれだけでは割り切れないような気がするのである。この南大原に居住した人々は、後背湿地に農業を営みながら、なおかつ縄文時代の伝統を引き継ぎ千曲川と密接なかかわりあいをもっていたからに他ならないと解したいのである。末尾ながら本発掘調査に御指導、御協力を賜った方々に深い感謝の念を捧げる次第である。

(高橋 桂)

参考文献

1. 神田祐治「山根遺跡」信濃考古学会誌2-3 昭和5年
2. 八幡一郎「有孔石劍の新資料」考古学雑誌23-1 昭和8年
3. 神田五六「信濃栗林の弥生式石器」考古学6-10 昭和10年
4. 藤森栄一「信濃の弥生式土器と弥生式石器」考古学7-7 昭和11年
5. 神田五六「北信濃栗林の弥生式土器」考古学7-7 昭和11年
6. 北信生「下水内郡豊井村発見の石器類」信濃16-3 昭和12年
7. 神田五六「北信濃栗林の弥生式土器新資料」考古学8-6 昭和12年
8. 神田五六「長野県下水内郡豊井村南大原縄文諸磯式遺跡概報」信濃3-8 昭和26年
9. 神田五六「縄文諸磯期に於ける低地性遺跡と高地性遺跡」信濃4-9 昭和27年
10. 長野県教育委員会編「下高井 長野県埋蔵文化財発掘調査報告I」 昭和28年
11. 桐原健「北信濃栗林の弥生式石器」信濃8-6 昭和31年
12. 神田五六「無土器時代の遺物を出した浜津ヶ池」信濃13-6 昭和36年
13. 金井汲次「長野県中野市片塩遺跡調査予報」信濃13-6 昭和36年
14. 桐原健・田川幸生「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」信濃14-4 昭和37年
15. 金井汲次・大川清「長野県中野市草間窯業遺跡」信濃16-11 昭和39年
16. 和島誠一編「日本の考古学 III 弥生時代」 昭和41年
17. 林茂樹・金井汲次・桐原健「長野県中野市栗林遺跡第三次調査概報」信濃18-4 昭和41年
18. 中野市教育委員会編「安源寺」 昭和42年
19. 金井汲次・川上元「長野県中野市浜津ヶ池と立ヶ花遺跡発見の先土器時代遺物」信濃19-7
昭和42年
20. 大場磐雄・内藤政恒・八幡一郎「新版考古学講座第4巻 原史文化上」 昭和44年
21. 上水内郡誌編集会編「上水内郡誌 歴史編」 昭和51年
22. 金井正三「中野市立ヶ花遺跡出土の前期縄文土器について」高井41号 昭和52年
23. 金井汲次「安源寺 II 第三次発掘調査報告書」 昭和54年

写

真



劳作风景

写 真 一 遗 踪 全 体



1. 調 査 前



2. 遺 構 全 景

写真二 調査区域内堆積土層

2. 北東~南西



1. 南東~北西



写真三
1号住居址



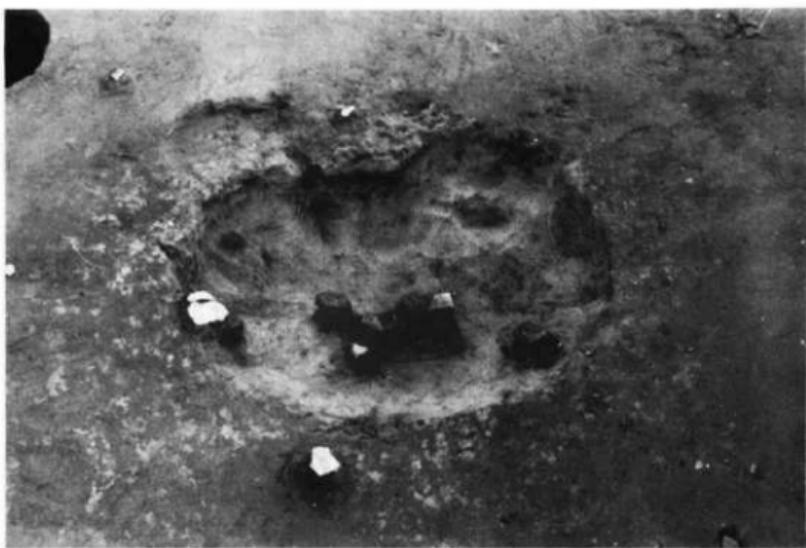
1. 遺物出土状態（東南より）



2. 住居址全体（東南より）



3. P 6 遺物出土状態



1. 炉 坑



2. 土器出土状態



3. 出 土 土 器

写真五

1号住居址出土遺物



1. 覆土内出土土器



2. 覆土内出土土器

3. P6 出土土器



1. 遺物出土状態（南より）



2. 住居址全体（南より）

写 真 七

2号住居址出土遗物



1. 壶形土器出土状态

2. 壶形土器



3. 出 土 土 器

写真八
3号住居址



1. 遺物出土状態（南より）



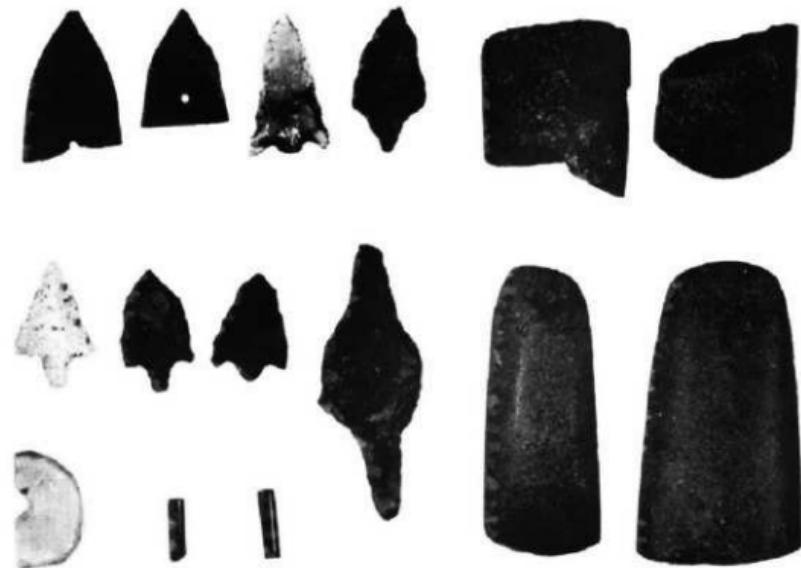
2. 住居址全体（南より）

写真九

3号住居址出土遺物と各遺構出土の石製品



1. 3号住居址出土土器



2. 1・3号住居址出土の石製品

3. 1号小穴他出土の磨製石斧

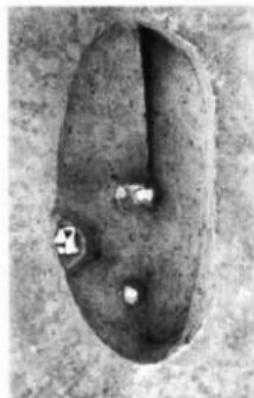
写 真 十 小 穴



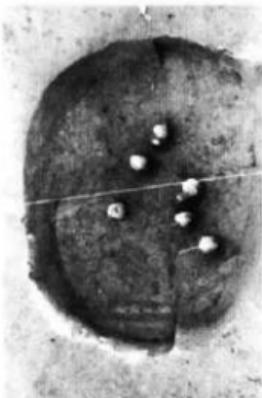
1. 1号小穴遗物出土状态



2. 1号小穴



3. 2号小穴



4. 3号小穴



5. 5号小穴



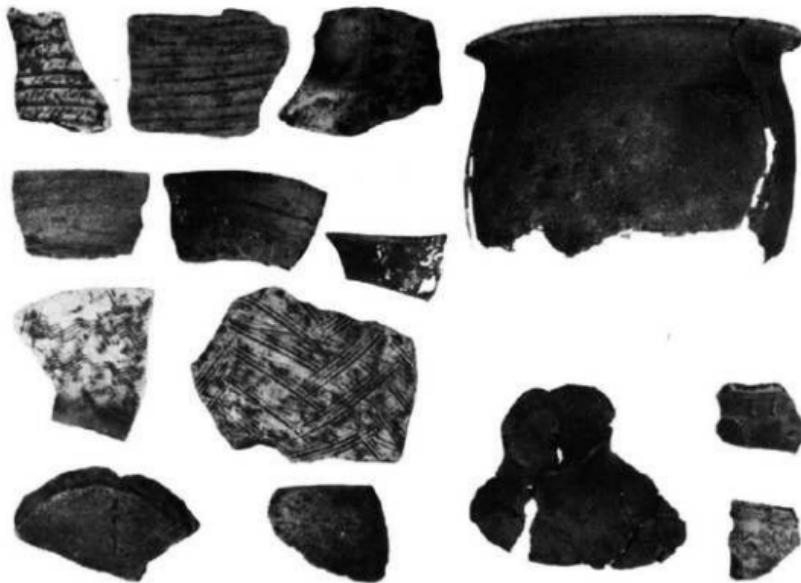
6. 4号小穴遗物出土状态



7. 4号小穴

写真十一

小穴出土遗物



1. 1号小穴出土土器

2. 2号小穴出土土器

3. 3号小穴
出土土器



4. 4号小穴出土土器



南大原遺跡

—上今井橋架け替え工事に伴う発掘調査報告書—

昭和55年3月25日発行

発行 豊田村教育委員会

長野県下水内郡豊田村大字豊津395-1

印刷 三成社印刷所

長野県上水内郡豊野町大字蟹沢155-1